



多文化社会学部

長崎大学

Nagasaki University  
School of  
Global Humanities  
and  
Social Sciences

# 共生文化コース

共

生文化コースは、多文化社会学部設置の中心メンバーの一人、葉柳和則先生にご紹介いただきます。

「このコースでいう『共生』とは、自分とは異なった言語や文化を背景に持つ人々を理解し、互いに共感し、協力して生きるといことです。世界がグローバル化していくと、同じ空間でどうやってお互いを傷つけずに生活するか、それがこれまで以上に切実な課題となります。移民問題と結びついたイスラムと西欧の対立などがその例です。東アジアでも日本と韓国、中国との国境をめぐる対立がグローバル化とともに激化していますね。共生という切り口から、文化や言語、思想、宗教に焦点をあてて勉強していくことで、解決の糸口を探っていきます。従来の学問領域でいえば、文学部に一番近いかもしれません」。

科目名を見ると思想史、宗教学もありますね。

「これまでの思想史や宗教学は、ある人物あるいは学派が残した文献の解釈が中心でした。しかしこの学部では少し違います。例えばアジアからの労働者といっしょに仕事をする、あるいは隣人として生活する。そこで『この人はどうしてこういう考え方や行動をするのだろうか』と疑問を抱いた場合、それを性格や国民性として決めつけるのではなく、その国の歴史や思想を知り、それが相手の言動にどのように現れているのかを理解していく。宗教学にしても經典の研究よりも、今のイスラムの人々が信仰を守り続けるのはどういうことだろうか、ということに重点を置いて学習します。その意味で文系的な『臨床』の学だと言えるでしょう」。

このコースでは、外国のことだけでなく、日本のこともしっかり学ぶのですね。「留学などで外国に行くと、日本につ

## 文化や言語、思想の違いを知り 共感し、共に生きていく そのための基礎を学ぶ

Interview



### 葉柳和則

Hayanagi Kazunori

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科 教授  
1963年徳島県生まれ。博士(文学)。専門は文化社会学、文化表象論。著書「経験はいかにして表現へともたらされるのか—M・フリュッシュの「順列の美学」(鳥影社)により、第7回日本独文学会賞(日本語研究書部門)を受賞。

Column

### 取得可能な 免許と資格

共生文化コースに所属し、「教職論」「英語科教育法Ⅰ、Ⅱ」「教育の方法と技術」「教育実習」などの教職関連科目を履修することにより、高等学校教諭普通免許状の「英語」が取得可能となる予定です(現在、申請中)。自らがグローバルに活躍することも素晴らしい進路ですが、英語教員は英語能力を直接に生かせる仕事であり、グローバル化の進む時代へと羽ばたく人材を育てる魅力的な仕事でもあります。

また、自由科目の「日本語教



いてよく聞かれます。ところが多くの日本人は自国の文化を説明することを苦手としています。しかし、能や禅について聞かれて「退屈なので寝てしまふ」なんて返せば、相手からのリスベクトを失ってしまいます。日本に生まれ育った人間だからこそ、日本やアジアを深く知り、英語で説明できて初めて文化交流ができる。日本思想史をはじめとする日本学関連の科目が必要なのはそのためです」。

ほかにどんな学習ができるのでしょうか。「私の専門は文化表象論でメインのフィールドはスイスです。フランス語圏、ドイツ語圏、イタリア語圏があり、文化はバラバラなのに、私たちはスイス人だという認識が共有されており、国を愛する気持ちは、フランスのような単

一言語国家よりも強いほどです。その理由を文化の観点から探っていきます。またモンゴルのキリスト教について研究している滝澤克彦先生、ルーマニア人でメディア文化論の視点から宝塚歌劇を研究しているグラジディアン・マリア先生など、専門だけで世界一周できそうな個性的な教員団ですよ」。

文化や思想の違いを楽しんで共生していける、タフな人材が育ちそうですね。

#### 学ぶ科目

- 日本思想史
- 中国思想史
- 宗教文化論
- 文化表象論
- 記憶文化論
- 地域文化論
- メディア文化論
- 現代言語理論
- 異文化間コミュニケーション
- 対照言語学
- 日本語学
- コーパス言語学

国際交流基金の二〇二二年の調査では、世界の二〇一の国と地域で三九八万人の人々が日本語を学習していますが、日本語教員の数はまだまだ不足しており、日本語を母語とする教員の割合も地域によっては、かなり低い現状にあります。特に英語の堪能な日本語教員に対する需要は高く、本学部で日本語教員基礎資格を取った卒業生はその条件を満たしていると言えます。

Message



### グラジディアン・マリア

メディア文化論担当予定者

### ポップカルチャーを事例に メディア時代の文化を探る

私たちは、メディアに囲まれて暮らしています。テレビ、ラジオ、インターネット、新聞、雑誌だけでなく、映画、演劇、書籍などがもたらす情報は、日常生活の中にあふれ、私たちは、世界中の出来事について居ながらにして知ることができます。しかし、あふれる情報から必要なものと不必要なものを選び分けることは容易ではありません。しかも、それらの大部分はネガティブな問題に関するものです。これらのことに気づくことが何よりも大切です。メディアによって刻々と提供される情報の海をうまく航海するために、我々には、情報の質を見極め、取捨選択する勇気と洞察力が必要なのです。

専門モジュールの「メディア文化論」では、日本と世界における多様で混沌としたメディア状況について講義します。主たる事例として宝塚歌劇を取り上げ、メディア研究の基本理論を、固有のメディア=媒介構造を有するこの劇場に適用することを軸にして講義は展開します。つまり、近代日本の文化現象としての宝塚歌劇と現代のメディア理論とが切り結ぶときに見えてくるものを検討することが、この講義の基本的スタイルです。

メディア研究の理論を学ぶことによって、メディアが伝えるデータやメッセージに対してはもちろん、教員が教える情報に対しても批判的な姿勢を持つことが可能になります。その際に鍵となるのは、情報と知識の差異を見分けることです。これがあって初めて、情報が知識へと変化する過程を理解することと、不要な情報と将来知識となる必要な情報とを見分ける能力を身に付けることができます。本講義の最終的な目標はここにあります。

私が強調したいのは、精選された知識と個人的経験が、卒業後の人生に役立つ知恵につながっていくということです。この講義の中で得たメディア情報とうまく付き合うための理論と実践的なスキルは、みなさんが自立し充実した人生を送るよう日々努力する際にきっと役立つはずですよ。